

論文要旨

BL マンガにおける妊娠する男性身体表象の研究

これまで BL は、男性同士であり、女性としての読者の身体性から遠いため、現実から離れて自由に楽しむことができるとされてきた。しかし近年、発情期があり男性も妊娠できる「オメガバース」という設定が世界的に人気を博しているためか、妊娠する男性が描かれた BL マンガが増えている。これは、BL が女性の身体性に接近しつつあるということなのだろうか。

本研究では、男性妊娠・出産設定の BL マンガにおいて、男性妊娠・出産を表現する際に、現実の妊娠の何が省略されるのか、何が強調されているのか、男性妊娠・出産にはどのような意義があるのか、そして、女性がメインである読者が男性妊娠・出産という女性身体を連想させる設定の作品を読む時、どのような感想を持つのか、といった問題を明らかにしていく。ついては、以下の仮説を立てた。

男性妊娠をテーマにする作品は、それが男性であることによって、女性身体と一定の距離を保ちつつも、従来は女性のもものとされる妊娠・出産の身体機能を描くことで、現実から離れて、ある意味自由に、女性が妊娠・出産、そして子育てをイメージできる可能性を表現しているのではないか。BL が現実の社会規範に縛られない性関係の可能性を開いてくれたように、男性妊娠・出産を扱う BL には、もしかしたらありうる、オールタナティブな妊娠・出産・子育てのイメージが描かれているのではないか。

LGBT が話題になり、「同性婚」についても議論されるようになる中で、男性が妊娠・出産・子育てする BL は、「子どものいる同性カップル」を具体的にイメージさせるとともに、カップルがより対等な妊娠・出産・子育てのイメージを提供しているのではないか。

もちろん、近年増えてきたとはいえ、BL 全体の中では、男性が妊娠・出産・子育てする作品はまだ少数だと言える。しかしその中では、現実に縛られない妊娠・出産・子育てに関する新しいイメージが描かれはじめている可能性もあると考える。

上記の仮説を検証するために、本研究では、1998 年から 2021 年 11 月までに発行された男性妊娠・出産設定の BL マンガ 113 作を対象に、妊娠・出産に関するいくつかの項目をたててデータを取り、数量的な分析を行った。またそれ以外に、人気ランキングに入ったり賞を受賞したりした 8 作品+とくに特色のある 2 作品=合計 10 作品について、詳しい物語分析を行い、男性の妊娠・出産がどう描かれているかを考察した。また、物語分析の対象とした作品群について、2 つのサイトから読者レビューを収集し、読者側の考えを把

握した。

まず、男性妊娠・出産設定のBLマンガは、電子専門作品を含め、1998年から2021年11月までに合計113作が発行されている。113作は、男性妊娠・出産を合理化する設定としては、「オメガバース」を筆頭に、「日本妖怪・神様」「男性でも妊娠できる時代」「獣人」「悪魔・天使・精霊」「宇宙人」「異世界・異次元」「両性具有」「男性でも妊娠できる夢」「新人類」「特異体質」という11種類の設定を用いていた。ちなみに「オメガバース」設定は42%で、全体の半分以下だった。

また、妊娠する方と妊娠させる方という2つの立場に分けて、それぞれに妊娠・出産に対する態度を調べると、どの段階でもポジティブな態度を持つキャラクターが最も多く、さらに、妊娠させる方が妊娠する方より積極的な態度を示す傾向があった。逆に、ネガティブな感情（不安など）を抱くのは、ほぼ妊娠する方に限られていた。

そして、妊娠期間の症状と出産過程の描写はある程度、現実の妊娠・出産を参照し、妊娠期間と出産過程の辛さを表現している。しかし現実と比べると、産後の辛さは省略されているのが一般的である。

育児の役割分担を見ると、カップルの二人が協力して育児していると描写されることが多い。また、育児に友人や近所の人などを含めて他人の手を借りる場合が多いなど、開かれた子育てがある程度実現されているともいえる。だが一方で、全体ではやはり受け中心の育児が3割を超え、産んだ方の親のなんと7割が、女親を示す呼び方で呼ばれているということから、異性愛家族を模倣する傾向が見られ、描かれている家族像の基本はかなり保守的であると言えそうだ。

さらに、物語分析の結果により、人気作においては、子ども＝愛の結晶という伝統的な家族観が常に見られる。受けが不妊ではないかと悩む設定の作品がいくつかあるが、たいいの場合、最後には子どもを授かったというハッピーエンドになる。

また、現実の子どもを考える時には経済的な条件が大きな問題になるが、人気作では攻めがスパダリに設定されていることが多く、現実の妊娠・出産の前に考えなければならない経済的な不安が合理的に省略されていた。

このように、物語分析の対象とした人気作においては、男性妊娠・出産という目新しい設定の割には、保守的な価値観が下敷きになっていることがうかがえる。ただその一方で、男性妊娠・出産設定によって、妊娠・出産・不妊・子育て・自立等の問題をある程度、自分とは距離をとって描き出すことが可能になっていることも確かだろう。

最後に「ちるちる」と「シーモアレビュー」という2つのサイトの読者レビューを通じて、男性妊娠・出産設定の作品を読む時、多くの読者は作品における男性妊娠・出産という設定を気にしていないことがわかった。さらに、BL読者が主である「ちるちる」と比べると、より一般的なサイトである「シーモアレビュー」の投稿者の方が、男性妊娠・出産に対してより無関心であることがわかった。どちらのサイトにおいても、作品における男

性妊娠・出産を受け入れない人は極めて少ない。

以上の内容を踏まえると、仮説は必ずしも正しくはなかったと考えられる。

妊娠期間と出産過程が描かれる時、妊娠中のファンタジーな症状やファンタジックな出産方法を通じて、あるいは産後の辛さの描写を省略することで、現実の妊娠・出産とは違う妊娠・出産を表現しているとはいえる。しかし一方で、男性妊娠・出産作品を通して、女性たちが「痛みのない出産」「楽な出産」を望んでいることはいかえりも、かなりリアルな出産の辛さの描写もあり、BLにおける男性妊娠・出産は、現実の妊娠・出産を相対化したり、意識的に変えていこうというような姿勢には乏しいと考えられる。

また、受け主体の育児が3割以上を占め、攻めの方が育児が下手だと描写されることが多いなど、まだまだ性別役割分業意識が残っているといえる。とくに、産んだ親の呼び方の7割が「母親」を指す言葉であるのを見れば、異性愛家族を模倣する形跡が感じられ、描かれている家族像の基本はかなり保守的であることがうかがえる。ただ、二人で協力し、家族以外の人の手も借りて子育てをしているところを見ると、やはり「対等な子育て」への希求は描かれていると言えるかもしれない。

一方で、男性妊娠・出産という設定が、妊娠・出産・不妊・子育て・自立等の問題をある程度、自分とは距離をとって描き出すことを可能にすることは確かである。

これまで、BLは女性であることの縛りから女性を解き放つもの、という解釈が多くなされてきたが、本研究で検討してきた男性妊娠・出産作品においては逆に、この社会の中で女性が体験している辛さを男性の姿に置き換えて示す批評的な側面が強いように思う。リアルな出産の辛さがある程度描かれたり、とくにオメガバース設定では、 Ω は月に一度の「発情期」には抑制剤を飲まねばならず、複数の人間の性的な欲望にさらされることがデフォルトで、そうした「子どもを産める」身体をもつことで Ω が社会的に差別されたり、女性的な身体をもつ苦しさを男性の姿で描き出しているように思える。つまり男性妊娠・出産作品はBLに、わざわざ「女性の身体性」を持ち込んでいるともいえるのだ。

性関係に関しては、**Sexual Double Standard** (性の二重基準) が指摘される通り、男性と女性とでは社会的な抑圧の大きさが違う。だからこそ男性の姿をとることによってBLは、女性であることの縛りから女性を解き放つもの、と解釈されてきた。男性の姿をとれば、より自由な性関係を描くことが可能だったのである。だが、妊娠・出産はどうだろうか？男性身体による妊娠・出産を描く時、参照されるのはやはり、女性身体によるリアルな妊娠・出産だろう。それ以外のあり方を誰も知らないからである。そういう意味では、男性身体による妊娠・出産の描写に、ある程度、女性のリアルな妊娠・出産の描写が持ち込まれてしまうのは無理もないことかもしれない。

男性妊娠・出産・育児の描かれ方は、思ったよりも保守的な側面が強かった。しかし、BLに描かれる男性妊娠・出産・育児には同時に、上記で指摘したような批評性がないとはいえず、非常に両義的なものであると言えるだろう。